

果実販売動向

販売課 田村 慎平



平素よりJA相馬村フルーツステーションをご利用いただき誠にありがとうございます。

6月の果実販売動向は、サクランボ・メロン・スイカを中心とした販売となりました。

サクランボについては出荷のピーク時期となり、月の前半はギフト対応が中心となったため市場への出荷量は限定的でしたが、山形県産佐藤錦の出荷がピークを迎える時期に合わせて各売場で企画販売などが多く組まれていました。しかしながら産地の天候不順による着色不足などの影響で産地からの出荷量が増え切らず、そのため前半は荷動きも良く、値段も高値基調でしたが、後半になるにつれ荷動きは鈍くなり、価格も下げ基調での展開となりました。

メロンについては熊本産の入荷が減少していき、関東産の入荷へ切り替わっていきましたが、産地が変わっても入荷量は安定していました。しかし売価設定の高さや、

消費地の気温がさほど上がらなかつたことなどから、月を通じて引き合いは弱く、価格は下げ基調のうえ荷動きも鈍い状況となりました。

スイカについては徐々に入荷量が減少していく中、消費地が各地梅雨入りなどもあり気温が上がらず、売場での引き合いは弱いままで推移していきましました。販売の中心がカット売、ブロック売となる売場も多く、その為流通在庫を多く抱えながらの販売となり、荷動きは鈍いままとなりました。

りんごについてはJA系統の出荷が最終盤となり、入荷量は減少している中、売場の縮小が進んでいっております。40玉・46玉に関しては比較的まだ引き合いはあるものの、大玉に関しては先月より引き続き荷動きが鈍い状況が続いております。ただ、入荷量の少なさもあり、価格は高値基準で堅調に推移しました。

当JAでも有袋ふじ・サンふじ・シナノゴールドの出荷は6月末で

ほぼ終了となり、7月からは有袋シナノゴールド中心の出荷となります。

今後は気温上昇とともに売場でも夏果実中心の販売となっていく、総体量が減少していくりんごに関しては、売場の縮小と引き合いの減少がさらに進んでいくものと思われる。厳しい販売状況が続くことになるでしょうが、有袋シナノゴールドの上位等級品など一定の引き合いが見込めるものもあり、令和4年産の販売に関して最後まで有利販売を目指してまいります。



出来秋に備えて順調に進むコンテナ洗浄

JA全農あおもりデータ（6/30 累計）

品 種	サンふじ	ふ じ	王 林	ジョナ	シナノゴールド	その他	合 計
単 価 (円)	2,663	4,681	3,217	3,758	3,336	2,737	2,841
前 年 比 (%)	80	98	94	95	88	89	85
販売数量 (箱)	5,533,801	471,270	711,897	275,648	275,756	3,330,585	10,598,957
前 年 比 (%)	116	98	105	89	129	107	112

生産情報

農業振興課主任 齊藤 大貴



りんごの果実肥大状況

ふじの肥大は、管内平均で昨年よりも4ミリほど大きく推移しています。また、平年値と比較しても7ミリほど上回っています。

良品質・安定生産に向けて

一通り仕上げ摘果を終了した後は、7月中旬を目途に見落としや過着果の部分がなにか確認し、必

表1：管内の品種別りんご肥大状況（7月11日調査）

品種	横径（単位：ミリ）					
	湯口	紙漉沢	相馬	平均	昨年	平年
ふじ	54.2	53.1	52.9	53.4	49.3	46.6
王林	57.9	51.6	54.4	54.6	49.9	47.6
つがる	59.4	57.3	59.2	58.6	55.9	52.6

※平年値は過去10年間平均値

ず見直し摘果を行いましょう。特にふじの場合は過着果にすると隔年結果を起こしやすいので、成らせすぎないように十分注意して下さい（ふじの標準的な着果程度：4頂芽に1果、着果率：25%）。

徒長枝（バヤ）整理や支柱入れ

徒長枝を整理することで農薬散布時に薬剤の通りが良くなるため、ワタムシやカイガラムシ、ハダニ類などの害虫発生を減らすことに繋がります。また、日光を樹冠内部にまで当て、葉の光合成活動を促すことにも繋がります。ただし、直射日光がきつく、気温が高い時に行くと果面ヤケの原因になるので注意してください。

ハダニ類について

ハダニ類は、気温が高くなると急増する傾向にあります。早期発見が重要な力グを握るため、予察を図りましょう。また、殺ダニ剤は予察を基に選択し、適期防除に努めて下さい。

落果防止剤の使い方

ストッポールは、葉から吸収されて効果を出すため、葉に十分かかるように散布してください。尚、葉摘みは、散布5日後頃から行いましょう。ただし、つがるに散布する場合は、高温時を避けて下さい（28℃以上）。新梢の先端部分に薬害が発生する場合があります。

農薬の使用時期・回数に注意

極早生種や早生種における収穫時期が迫ってきました。恋空やきおつ、着色優良系統のつがる等がある方は、収穫前45日や30日の薬剤に十分注意しましょう。

水稻について

幼穂形成期を終え、穂ばらみ期にはいります。平均気温で20℃以下になる場合には15センチ以上の深水で管理し、幼穂の保温に努めてください。高温時には4センチ程度の浅水とし、高温が続く場合には、時々水の入れ替えをし、根の老化防止に努めてください。また畦畔の草刈りはカメムシ被害防止のため、7月中旬で終了してください。

また、中干を十分に出来なかつ

た場合は、おおむね出穂7日前（7月20～23日頃）から出穂期までの期間（7月末を目安）に落水し地固めをおこなってください。

●りんご病害虫防除暦（第9回目～第10回目）

回数	散布量	散布時期	基準薬剤	希釈倍数	備考
9	500㍓	7月中旬	キノンドー（顆水） ユニックス（顆水） トランスフォームF カルシウム剤	1000倍 2000倍 4000倍	○褐斑病対策としてユニックス顆水2000倍を加用してください。
10	500㍓	7月下旬	ダイパワー（水） オリオン（水） カルシウム剤	1000倍 1000倍	

リンゴの赤ちゃんかわいいな

6月6日、相馬小学校3年生のリンゴ栽培学習摘果編が行われ、児童16名含む24名が集まった。

初めに農業振興課の齊藤主任がクイズを出しながら摘果について説明すると、園主の山内牧さんが株をひとつ手に取り、指をどのように使うのかを児童に説明。

作業を開始すると「いつも畑で手伝っている」と大場心寧さんは、大人顔負けの速さで摘果を進め、周りを驚かせていた。

しばらく作業をすると「指が痛い」「たくさんとった」と摘果した実を大切そうに手に持っている児童の姿も見られた。

質問の時間には、いつから実を落とすのか?という質問に山内さんが「花のうちから。良い実を残す意味もあるが、数を減らさないと樹が力を使い切ってしまう、来年実がなくなる」と話し、児童らは摘果作業の重要性を理解していた。



摘果スピードは農家並み?!
スーパー3年生現る



株をひとつ手に持ち、
摘果の指使いについて説明をする山内さん



真剣に話に聞き入る児童たち

冷蔵庫に響くねぶた囃子

6月12日、五所地区の『佐藤さん太』さん率いる篠笛の全国大会出場者約20名が、当JAFフルーツステーションの選果場を訪れた。選果場は稼働していない時期だったが、リンゴがバーコード付きトレイに載せられ光センサーを通過する様子など、山内耕平センター長からの説明に、参加者は想像力を膨らませながら、驚き感心するなど耳を傾けていた。

冷蔵庫に入ると全員で篠笛を構え、ねぶた出陣囃子の演奏が始まった。冷蔵庫全体に響き渡る音色は神聖な雰囲気醸し出した。様々な縁を繋いでくれる地域の応援に感謝したい。



充実した笑顔のお囃子
なんと山口県から来た方も!

HOW TO 高品質リンゴ

6月12日(月)、当JAF女性部は地域の女性を対象に『女性のための仕上げ摘果講習会』を開催し、地域の女性12人が参加した。コロナ禍の2年間を除いて平成22年から継続して続けている活動だ。

講師を務めた田澤俊明さんは摘花・摘果は早い時期に行くと隔年結果が防げるとしながら「実を残しすぎるとお盆時期に再度摘むことになる。早く強く、を意識して摘果作業をしてほしい」と話した。参加した女性は「勉強になった。品質の良いりんごを作るため、今日学んだことを役立てたい」と、これからの農作業に意欲をみせた。



講師の田澤さん(右)から話を聞く女性部
田澤真由美部長たち

摘果作業へテイクオフ

6月16日から3日間、五所地区山内俊一さんの園地に日本航空株式会社のパイロット3名が訪れ、農作業をおこなった。

日本航空による援農作業は今年で4年目。最初は767便のパイロット有志からはじまった活動だった昨年からの社員にも募集枠を拡大した。ただ、運航便の本数はコロナ以前に戻っていることなどから、休暇を取得しプライベートな活動として園地を訪れている。「津軽のリンゴ」の味が忘れられなかった。数分で終わってしまう収穫体験のようなものではなく、数日お世話になり一緒に作業をやってみることに意味がある」とJAし大西伸幸さんは、受入農家への感謝を伝えながら話した。



俊一さんの説明を熱心に聞き理解を深めるJALパイロットたち

農福チャレンジ

6月19日、福祉事業所『つながり芸術館バナナの樹』から、職員1名と障がい者2名がリンゴ摘果作業に訪れた。園主の嶋口千速さんは作業のポイントを教えながら「無理なく進めてほしい。手伝いに来てくれると助かる」と話した。

市内に福祉事業所が増えたため、人員の分散化が起こっている現状もあるが、事業所側は「利用者らは単純に続く作業が得意」とし、また選果場でも力になれることがあればお手伝いしたいと話していた。農に関わる労働力不足の解消を通して、お互いにとって良い活動を継続していきたい。



摘果作業について聞きチャレンジをする福祉事業所利用者

肥料高騰対策事業の受付

6月22・23日の2日間、肥料高騰対策事業の受付を、本所倉庫前と相馬支所にて行った。

令和5年の春肥として使用する肥料が対象で、前年比で増加した分について、その7割を支援金として交付するもの。土壌診断をすることが申込条件となっているため、組合員172名が1kg程度の土を持って受付をした。

受け付けた土はその後乾燥させ、細かく砕いて分析機関へ送られる。今回初めて診断を受ける組合員もいたかと思うが、今後も土壌診断を受けて、適正施肥に努めてもらいたい。



土の乾燥具合を調べる振興課山内さん

野球部の援農トレーニング？

6月25日、弘前学院聖愛中学校高等学校の女子硬式野球部の部員ら20名が、管内園地3カ所に分かれて摘果作業を行った。これは農作業における労働力不足の解消と、地元における基幹産業であるりんご作りへの理解促進を目的に、初めて実施したもの。部員らは次第に摘果作業に慣れ、最後はハシゴを使うなどして高い場所の摘果にも挑戦していた。

太田淳監督は「第2の故郷となる弘前の主幹産業であるりんご作りに携われたことは意義深い。野球部の活動理念である他者への貢献にもつながる経験をさせてもらった。また機会があればお手伝いたい」と熱く話した。



『日本一になり女子野球の良さを世界に広める～りんごを持って～』を理念に、元気いっぱい援農活動してくれた女子硬式野球部